

スタンダード考

埼玉大学 馬場久志

相変わらずの「スタンダード」

今年も教育のつどいでは、各地の教育実態が数多く報告された。そこでは毎年、学習規範や行動規範の「スタンダード」という画一管理的な規則の実態が報告される。今年もいくつもの事例を耳にした。

休み時間の過ごし方、給食時の行動、教員への接し方、服装の細々としたことがらをはじめ、膨大な項目数の規則が定められている。そしてところによっては、機械的にこれまた規定化された罰則が伴う。

これらは、子どもたちにとっては、判断力の育成を妨げ、逆に管理されることの学習がなされてしまうものであり、民主社会の形成者を育てる教育からみて大

変に有害なものと言わざるを得ない。

それなのに、なぜこのような「スタンダード」が各地でまかり通るのか。単に管理志向の強い者が軍隊の閲兵のようなことを好むというだけではないだろう。あるいは、こうしないと校内が瞬時に無法状態になるというところまで、どの学校も戦場化しているわけでもない。

「スタンダード」を正当化する理屈には、社会の厳しさに習うのだとか、学習活動と学力形成の前提だということが多く語られているようである。中学校などでは高校入試に備えてと言われるところもある。生真面目な大人ほど、こうした理屈を受け入れやすい。だが当の子どもたちは、今の社会の歪みをもった厳しさや、進路に立ちほだかる現実のことくらいすでにわかっている。だから学校に妙な規定があつてよいというのは説得力を

もたない。

もちろん、子どもたちの自立をめざす多くの教員はこれとたたかっている。そうであるのに依然進行するのは、昨今の上意下達の学校体制のためでもあるが、見落としてならないのは、いわば地殻変動のように社会の価値軸が少しずつずらされているということではないだろうか。多忙を極める学校現場の生活の中で「スタンダード」を受忍することに、子どもを軸に踏ん張る気力体力の黄信号が読み取れる。「スタンダード」の内容もさることながら、これへの慣れに流されるを得ない大人たちの価値環境の問題として、深刻なものを感じる。

「スタンダード」は誰のため

ところで、教育のつどいでは、学級の子どもの様子を丁寧に分析し、見通しを立てながら学習規律を設定して取り組んだある実践が報告された。報告者自身が「スタンダードとはどう違うだろう」という躊躇を交えての報告で、大事な論点の提出だったが、参加した富田充保氏が問題を明快に喝破した。それはつまり、

スタンダードは教員の立場に立つもので
しかなく、当実践で取り組んだ規律は子
どもの立場に立つもので、違いは明確で
あるという趣旨だと筆者は受け止めた。
この峻別は「スタンダード」の本質を突
くものである。実際に「スタンダード」
は子どものためという装いで示されるだ
けに、その偽善性を疑うことは意味深い。

ただし問題はそれだけでは済まない。

教員のためではよくないのかという論
点は残される。どの教員も同じように指
導ができることが最低限の資質だという
声が上がら聞こえてくる中で、教職に就
いて日の浅い教員にとって、指導技法の
取得は切実な問題である。そうした中で
は「スタンダード」もその一つに見える。
だが、教員が先輩教員の経験知に学び、
そのやり方をまねてみようというであれ
ば積極的である。一人の教員の専門性は、
目の前の子どもたちの現実をとらえ、教
員集団の知恵に学びながら、困ったとき
の力として培われていく。しかし「スタ
ンダード」はそういう教員の考え抜かれ
た学びとは同列ではない。

近年、教員の世代交代が不均等に済み、
熟練者は退職し中堅層は少ないところ
に、多数の新任者を迎える職場になつて

いる。若い教員たちは身近なモデルに恵
まれないまま力量の促成が求められる。
加えて重大なのは、採用時に「一人前」
であることへの社会的圧力がつくられ
て、何か指導技法をもたないといけない
という圧迫感がある。その上、学校現場
には説明責任論が浸透し、これが新任教
員をも脅かしている。何か、形のある技
法に手を出さざるを得ない背景環境に、
教員、特に若い教員が置かれているとい
う認識をもつ必要があるだろう。だから、
人は、人とのつながりを手がかりにしな
がら、時間をかけて成長するということ
が、子どもだけでなく教員も同じである
ことにあらためて思いをはせ、競争社会
では消し去ろうとしている「ゆとり」を、
子どもたちのみならず教員など大人たち
にも取り戻す必要がある。

その意味で、「スタンダード」は成長
する教員のためにもならない。

矛盾と克服

上からの教育目標は、次世代に自発的
で創意のある人材を育成しなければと主
張しながら、他方でかような「スタンダー
ド」になじませるといふのは、支配に好

都合な国民の育成を脱することの出来な
い為政者の抱える矛盾である。これが続
く限り、格好のよい教育政策が掲げられ
ても信用できないのだが、私たちはこの
矛盾に巻き込まれたくはない。しかし私
たちは知らず知らず刷り込まれている競
争と管理の発想によって、怒りの感性が
鈍らされているのかもしれない。

そのような中で、「スタンダード」を
受忍する大人たちの弱さを叱咤激励して
くれるのは、理不尽さに敏感で、不条理
な理屈に弱い大人とは異なる力をもつ子
どもたちの存在であろう。子どもたちが
感じて見抜いているものに素直に学ぶこ
とが、大人にとって初心に戻る手がかり
になるのだと思う。

「特別の教科 道徳」を考える 分科会に参加して

熊谷市立星宮小学校 除村美和

参加にあたり

今年度初めて設けられた特設分科会「特別の教科 道徳」を考える」の分科会。私は、昨年度「教育課程・教科書」の分科会で道徳の授業を中心とした内容のレポートを出した。今回は特設分科会となることや来年度、特別の教科として小学校では実施されることもあり、全国からいくつか実践レポートが出されるであろうと思った。また、前日に参加した教育フォーラム「学習指導要領が変わると子どもと学校はどうなる？」では「なぜ道徳教育だけのフォーラムを作らなかったのか」と参加者から意見が出ており、つどいの参加者の道徳に対する関心は高いことがわかった。

二日間の討論や自分の実践

分科会は出版労連1本、公立中学1本、私も含め公立小学校3本、私立小学校1本の計6本のレポートが発表された。山口の複式学級の小学校の実践は、レポートがゆいまーるに参加した後に「対馬丸と日本国憲法について」、社会や道徳で子ども達と考えたものであった。道徳の副読本では義務は「守るべきもの」として大きく取り上げられているが、権利についてはあまり扱われていないことが多い。しかし、子どもの権利条約は道徳教科書に掲載している教科書会社もあると聞いた。教科書教材を取捨選択して扱えば道が少し開けるのではと思った。北海道の中学校の実践は、学年で取り

組んだ「思いやりって何だ？」をテーマに生徒に思いやりの内容の物語を創作させて、そこから始まった紙上討論であった。創作物語とはいえども、子ども達から出ている物語で意見を交換することで子ども達に返っていて、誰が書いたかは載せていないので、思春期の時期に言いたいことが言える環境の保証をしていると感じた。

兵庫の小学校の実践は、阪神大震災当時小学生だった教え子の話をし、被災体験による子どもの変化や教師の支援についてという内容だった。一教員として、子ども達をどのようにとらえ、耳をかたむけ、かわりつていくかという日々の学級づくりを学べる実践であった。「特別の教科 道徳」とは少し違うが、学級づくりというところで道徳教育だから、この分科会なのだろう。私はここで疑問に思った。「道徳教育を考える」ではなく、「特別の教科 道徳」を考える」という分科会にしたのはなぜなのか。分科会に参加している五十人くらいの人達は「特別の教科 道徳」は反対」と思っている。しかし、小学校は来年度から「特別の教科 道徳」の授業が始まる。さあ、どうしようか。全国のみんなで考えようという

趣旨で特設されたのではないか。それならば、「教材をどうするか。授業をどうするか。」をもっと意見を出して討論した方がよいのではないか。

私立小学校の実践は学級づくりの実践だった。作文を読み合い友達とのしんどさに寄り添ったり、みんなで悩みを話し合ったりと子ども達一人ひとりをつなげている。学校の道徳教育の方針が終わりに書かれていた。最初の項目はできないが、他の項目は公立の小学校でもできそうだ。

①今後も「道徳」を教科とはしない。

②平和と民主主義を求め「共に生きる」見方や考え方を教科教育や生活全般の中で育んでいく

③安心と安全の中で自由に表現し、対話を重ねていくことのできる空間を追求していく

④互いの要求を出し合い、子ども主体の学校作りの中で、主権者を育てていく私のレポートは「お互い高め合える仲間づくりを目指して5年生11人との1年間」というタイトル。初めての高学年担任で、家庭や人間関係の悩みを抱えた子ども達と向き合った1年間を綴った。道徳の授業のこととクラスづくりについての内容だ。私は道徳授業を①既存の教

材を読み替える②既存の教材をカットしないバージョンで提示する③自主教材を使う④テーマで話し合うなどで行っている。ただ、ここには子どもから出発していないという問題点がある。内容は、民主主義、平和、人権、環境などがいいとは思っているが、なかなか教材を見つめる時間をとることが難いため、自主教材はあまり使っていない。今回のレポートは主に学級づくりについて書いた。11人という固定化された人間関係の中で子ども達をどうつなげるか。班リレー日記に取り組んだが、「〇〇をして楽しかったです。」という内容で、本当にそれを書いて伝えたいのか疑問が残った。一方で自主学习ノートに担任である私に向けて「しんどさ」を伝えてくる子や最近の友達の様子を日記にする子はいた。討論の中で、子ども達の話やつばやきを大事にしているけれど、子ども達同士をつなげるといふ視点がいまいち伝わってこないという指摘を受けた。これを聞き、私は2年前も同じことを別の場で言われたことを思い出した。人数が少ないから。

みんながみんな、1日に何回もかわるから。1からクラスづくりをしているわけではないから。言い訳をしていたのか

参加して

もしれない。嬉しいことは11倍に、悲しいことは1/11に。私のクラスづくりは、子どもから出たネガティブな感情をどうやってクラスで共有し、子どもに返すかが課題だということがわかった。

道徳の授業においては教材そのものを問うこと、そして主権者教育や多文化共生を目指して民主的な学校をつくることが大切であると共同研究者である大東文化大の渡辺雅之さんは討論をまとめていた。私は、ジェンダー平等や人権、平和、生活指導・自治的活動の分科会に提出されたレポートに私が考える道徳授業のヒントがあるのではないかと思った。それと同時に、来年度のつどいではいくつか対抗実践が出てくるのではないかとも思った。分科会参加者には、青年が約50人中5人程度しかおらず、青年の関心の薄さが気になった。埼玉でもそうかわたらない。小学校は教科書採択が終った。いよいよあと半年。4月をどう迎えるか。仲間と学習していく必要があるか。仲間と学習していく必要があるか。仲間と学習していく必要があるか。仲間と学習していく必要があるか。